

## <技師会・技術学会合同討論会>

### 「自ら立つ・守る・ひらく未来 ～原発事故を教訓に～」

第3回東北放射線医療技術学術大会  
大会長 遊佐 烈

今学術大会では(公社)日本診療放射線技師会中澤靖夫会長、(公社)日本放射線技術学会真田茂代表理事にご出席を頂き、平成23年3月11日に起きた東日本大震災での原発事故を教訓として我々放射線技師が成すべきことについてそれぞれの立場からご意見を伺った。

原発事故の直後から(公社)日本診療放射線技師会では全国の放射線技師に呼びかけ、福島での避難住民へのスクリーニング及び検案前遺体の線量測定を実施されてきた。最初の汚染限度の目標値の13,000cpmから唐突的に100,000cpmへの変更に対しての説明もはっきりしない中での作業は、スクリーニングを受ける側も、行う側にもかなりのストレスになった事は言うまでもない。(社)福島県放射線技師会も鈴木憲二前会長の指揮の下、避難所での住民のスクリーニングや検案前遺体の線量測定に多くの会員が参加し、放射線技師という職業を広く認知して頂いたと思う。そんな中、鈴木憲二前会長が突然亡くなった事は断腸の思いであるが、それを引き継いだ斎藤康雄会長の下、放射線関連パネルの掲示や出前講座にお伺いして放射線に関する情報提供を行っている。

(公社)日本放射線技術学会では放射線・放射能に対して正しい知識を持って頂くために、「放射線・放射能を正しく理解するための市民公開講座」の開催を決め、平成23年7月には第1回目の市民公開講座を行っている。この時期、福島県内では多くの講演が行われており、放射線における現状分析においては両極端の講演が多数行われた事もあり、一般市民にとっては一体何が本当なのか判断が出来ずに非常に不安な精神状態であったことは疑う余地もない。技術学会が行う市民公開講座では、放射線・放射能の基礎的な情報の提供と、放射線防護分科会のメンバーが相談コーナーを設け、住民の方々の色々な相談に対応して頂いた。色々な情報が錯綜する中で、何が不安で何に困っているのかを聞いてあげるこのリスクコミュニケーションの重要性を強く感じた。「放射線・放射能を理解するための市民公開講座」は毎年行われており、この相談コーナーも、一般の方たちにとってはピンポイントでの質問をぶつけることが出来、大勢の前でなかなか質問しづらい事でも聞くことが出来る、重要な部分であることは間違いない。

原発事故から3年近くが経過しているが、東日本大震災の復興が思うように進まない中、報道もだんだんと少なく

なり、国民の関心が薄れだしてきているのではと思う事がテレビを見ていて感ずる。自分の家に帰れないで、未だに仮設住宅での生活を強いられて、孤立感と怒りと絶望感が交錯する中、少しずつ前に進もうと立ち上がって一歩を踏み出している方々も多い。放射線・放射能に対する不安が無くなった訳では無いが、住み慣れた土地を離れ、新たな地で生活の場を築こうとされている方もいる。福島原発を廃炉にする事は決まっても長い年月を要する中で、私達放射線技師がやらねばならない事とはいったい何だろうか？医療被ばくも含めて、放射線についてきちんと説明出来るだろうか。放射線について質問されたときに的確に答えるだけの知識を備えているだろうか。(公社)日本診療放射線技師会や(公社)日本放射線技術学会では個人のためのスキルアップのため色々な催しが準備されておりそれを有効利用して頂きたい。二度と原発事故が無いとは断言出来ない現状である。測定機器の使い方の習得も大切だし、相手の不安をいかに和らげられるかに対しては、正確で豊富な知識と相手と同じ目線に立ち、傾聴するというリスクコミュニケーション術を身につけることである。安心とは相手に押し付けるものではない。これを忘れるといかに正しい情報であろうと、相手は心に壁を築いてしまい懐疑的になってしまう。

これからの未来を担う子供たちにも笑顔が戻り、親達も心から健康になれるように、今後も(公社)日本診療放射線技師会・(公社)日本放射線技術学会会員諸氏のお力をお借りしながら、放射線技師のボトムアップを行うとともに一般市民の方々に信頼され頼られる存在になっていかねばならない。

福島市内の住宅地でも除染が始まり、各家庭の庭の土が削られ、容器に入れられてから庭に埋め戻され、新しい土がその上にかぶせられている。容器に入れられた土は何時、何処へ運んでくれるのか、何も決まらないまま実施されている。一般住民の不安は簡単には解消されないだろうしその怒りの矛先は、患者さんと直接向き合う事の多い我々へ質問となって現れる事が予想される。そのような時にこそ、数値の意味する事を解りやすい言葉と共にリスクコミュニケーション術を駆使していけるように、積極的に被ばく医療セミナー等にも参加し、一般住民の方から頼られ、信頼される存在にならねばならない。